

早稲田大学審査学位論文(博士)

早稲田大学
学位請求論文

空海思想形成過程の研究 概要書

吉田宏哲



早稲田大学
学位請求論文

空海思想形成過程の研究 概要書

吉田宏哲

一、本論文の構成について

まずはじめに本論文の構成について述べると、本論文は三部から成り、その第一部は『大日経』住心品研究。第二部は大乗仏教の諸思想と空海の思想。第三部は空海思想の諸特相である。

「空海思想形成過程の研究」という本論文のテーマの追求にあたって、その構成をこのように三部に分けて論じた理由は、当面する研究課題である空海の思想がきわめて多様性に富み、かつその多様性が単に雑然とした多様性ではなく、思想的・哲学的に統一された多様性、したがって一つの総合的思想体系を形成しているからである。そしてこのような総合的思想体系を研究するためには、二方面からのアプローチが必要であり、それは歴史的なアプローチと、思想的なアプローチである。

本論文の三部構成のうちの第一部及び第二部は空海思想に対する歴史的なアプローチであり、第三部は思想的アプローチであるといえる。このうち、歴史的アプローチはまた二部に分かたれているが、これは空海思想の最も主要な構成要素を『大日経』住心品およびその注釈にあると見て、この研究が第一部であり、つぎに『大日経』住心品およびその注釈が歴史的に、したがって仏教思想史上いかに形成されたかを研究するという作業を行い

つつ、かつそれとの対比において空海の思想が他のいかなる思想を取り込んで形成されたかを明らかにする作業が第二部の研究である。そこで「空海思想形成過程の研究」という本論文のテーマからいえば、この第一部・第二部がその課題に応える主要な研究であり、第三部は付随的な研究であるといえる。しかし第三部といえども、空海をその総合性においてではなく、その特殊性あるいはその特相において、思想史的に研究したという意味では、やはり、第一部・第二部と同じく本論文のテーマについての、別の角度からの研究ということができよう。

二、第一部の概要

『大日経』住心品およびその漢訳の注釈が空海思想の核心を成していることは、この第一部の結論ともいうべき、第八章の『大日経』と空海なる終章で明らかにした。

しかし、空海思想の形成過程の研究を、空海の所説を念頭に置きつつ研究したのでは、たとえば『大日経』住心品の研究にしても、空海の眼を通して見た住心品研究に終わってしまう懼れがあるであろう。そうではなくて、『大日経』は『大日経』として独自に研究し、かつその研究の成果に基づいて、これを空海の思想と比較検討すること、これが『大

日経』のみならず、空海思想の独自性を明らかにする学問的方法である。

そこでこの第一部においては、第一章から第六章までは、『大日経』住心品および具縁品の蔵漢の経および注釈による比較対照研究を行い、ついで第七章において、『大日経疏』の著者と見做される一行阿闍梨の思想について論じた。第七章までのこれら一連の研究の特色は、『大日経』住心品および具縁品を漢訳の経および注釈書のみによって研究したのではなく、蔵訳の経と注釈書によっても研究したことである。これはあらゆる学術研究にとっては当然の作業ではあるが、空海研究というテーマからいうと、空海は漢訳の経疏のみによってその思想を形成したのだから、『大日経』の蔵漢対照研究は必ずしも必要はないともいうことができる。しかし、結果的にはこの第一部における『大日経』の蔵漢対照研究は中国密教および空海思想の特殊性を明らかにすることを可能ならしめたから、本論文のテーマ研究にとっては有効であったと考える。

そこでまず、第一章、菩提心の規定においては、『広釈』と『大疏』が『大日経』において菩提心をいかなる位置に措定しているかを検討し、ついで両釈による菩提心の定義を抽出して、これを比較した。これによって、『広釈』は菩提心に三種の意味を見、『大疏』は四種の意味を見ていること。および『広釈』における菩提心はとくに初地菩提心を意味し、これは瑜伽行唯識に説く初地菩提心の規定と一致すること。これに対して、『大疏』

は四種の菩提心を説きながらも、その解釈の立場は如来藏思想により、かつ信解行地と十地を同一視し、また初地即極を説くことを明らかにした。

つぎに第二章においては、『大日経』住心品の三劫段といわれる箇所のうち、百六十心の解釈と初劫および第二劫の前半の解釈において、『広釈』と『大疏』の釈はどのように相違しているかについて考察した。すなわち、両釈における解釈の相違は、①百六十心。

②劫、③機根、④思想的背景に関して存在するが、そのうち、機根に関する解釈の相違は、『広釈』が、鈍根と利根に応じて経文が説かれているのに対し、『大疏』は歴史的教説の浅深とこの歴史的に説かれた教説を真言行者が学んでいくことによって、真言行者の心品が転昇していくと解釈している。つぎに思想的背景については、信解行地の相に關する『広釈』の解釈と、『大乘莊嚴經論』の安慧釈との共通性を指摘した。

第三章は、『大日経』住心品の六無畏段について蔵漢注釈の比較対照研究を行ったが、六無畏段とは八心段から三劫段、十地段（これらは日本における『大疏』の末釈の分類）に至るまでの科段に対する別の視点からの再説である。六無畏段の各無畏に対する解釈の相違は省略する。そこでこの章の結論は、信解行地と十地との関係に対する両釈の解釈の相違。入地に対する解釈の相違。『大疏』が秘密神通乘という規定を持ち出すことによって、漸進的な心品の転昇を速疾に飛び越えて仏地に至る方法を説いたこと、である。

第四章は、第一章から第三章までの詳論を要約する形で、住心品に対する蔵漢両釈の解釈の異同を明らかにした。すなわち、①『大日経』住心品と具緣品以下との関係についての両釈の相違、②両釈の菩提心解釈の相違とそれに関わる三句（因・根・究竟）の解釈の相違、③六十心段・三劫段における両釈の相違、④劫の解釈の相違、⑤信解行地と十地の関係に関する両釈の解釈の相違についてである。ただしこの章では資料的考証がなく、第一章から第七章までの資料的考証に基づく結論の要約であることを予め指摘しておきたい。第五章はブッダグヒヤの具緣品解釈を①毘盧遮那仏身と『大日経』、②住心品と具緣品以下との関係、③曼荼羅と曼荼羅行、④三世無障礙智戒の四項について考察した。そしてこの中で、ブッダグヒヤの『大日経』解釈が瑜伽行唯識派の所説である如理作意瑜伽と接続していること、しかも真言密教における如理作意瑜伽の対象は真言と印契と曼荼羅であること、および三世無障礙智戒についてのブッダグヒヤの解釈を考察した。

第六章では住心品における大乘的なものと密教的なものを明らかにするために、住心品の三劫段、十地段、六無畏段、十緣生句段のそれぞれについて、その思想構造の特徴を『大疏』および『広釈』によって対比的に考察し、更にこれに対応する『大乘莊嚴經論』『究竟一乘宝性論』の思想を対比し、つぎに『大日経』の教主である大毘盧遮那如来の仏格について二論書の仏身觀の異同を考察し、結論として、『広釈』が瑜伽行唯識の修行論の

立場から住心品を解釈しているのに対し、『大疏』は劫を時間ではなく、妄執と解釈することによって即心成仏の可能性を説き、真言門においては信解行地は十地であり、初地即極であると説いたことを資料に即して明らかにした。

第七章は一行阿闍梨の思想を普無畏三蔵の思想と区別するための方法論的諸問題を提起し、それに基づいて、①一行阿闍梨の伝記・著作等の検討。②ブツダグヒヤの釈との比較。③『大疏』の引用文献と非引用文献。④『大疏』の内容的考察、の四点について考察した。これらによって、一行阿闍梨の思想傾向として、唯識系の仏教の上位に如来蔵仏性系の仏教を置き、また華嚴經十地品の深秘釈として真言門の思想を位置づけていることを指摘した。

第八章は『大日経』と空海の思想との関係の考察を、①空海が求めたもの。②『大日経』の提起する諸問題。③空海教学の構成と『大日経』、という三つの視座より行った。しかし、この章では、第七章までが蔵漢の注釈に基づく『大日経』研究であったのに対し、空海教学が『広釈』の存在を知らず、『大疏』のみによって構成されている関係上、『大疏』と空海の教学との関連のみを詳説した。

三. 第二部の概要

第二部は本論文のテーマである空海思想形成過程の研究の中心ともいうべき内容を有しており、その構成は目次によってもわかるように、大乘仏教思想のうちの中観・唯識・如来蔵の諸思想と空海の思想との関係、および、『釈摩訶衍論』、華嚴經、不空三蔵の密教と空海の思想との関連についての論攷である。

そのうち、第一章、中観仏教の思想と空海教学では、一、中観仏教思想とは何か。二、『大疏』と『広釈』の比較研究による『大日経』における中観仏教思想。三、空海教学と中観仏教思想、という三項よりこれを論じた。これらの研究による結論は、中観仏教の二諦の智慧も空性智も、三論宗の教義という限定された形では大日如来の部分智であり、『十住心論』の第七住心に位置づけられているが、中観仏教の中心思想はその教学の全体の中で活用されていることを指摘した。

第二章の瑜伽行唯識と『大日経』では、第一部・第七章と重複するところがあるが、ブツダグヒヤの『大日経』解釈を考察し、ついで、『大日経』と瑜伽行唯識との関連を、如理作意瑜伽、入無相方便観、四智、神変加持という四つの視座から比較検討した。

つぎに第三章では第二章の所説を受けて、さらに瑜伽行唯識から密教へという思想史的

視野のうちでこれを考察した。その場合、主題を四智から五智へという仏教思想史上の智の規定の転換の研究に止ったが、智の問題は結局、成仏論の問題であるから、研究の項目を①四智と五智、②成仏の四つの契機、③成仏論の批判的綜合、④成仏における主体性、⑤成仏論の見取り図、という五つに分け、この一般論をもとにして、つぎに成仏論の詳細を試みた。これが第二節の業煩惱論より見た仏教諸学説であり、ここでは阿毘達磨仏教、中観仏教、瑜伽行唯識、如来藏思想という四つの仏教思想の業煩惱論とその転換の論理を、それぞれの思想と思想の間の関連を考慮に入れつつ考察し、ついで、瑜伽行唯識から密教へとというテーマで、『大日経』の成仏論の思想史的形成の過程を明らかにした。そしてその結論として、瑜伽行唯識から密教へという過程はストレートに接続しているのではなく、その間に唯識から如来藏思想への転回が介在し、かつ如来藏思想から密教への転換も仏身論や実践修観の面で新たな様相を呈するに至ったことを指摘した。

第四章では空海教学が如来藏仏性思想といかに関わっているかを明らかにしようとしたものであるが、章題は本覚思想と空海教学とした。その研究の項目は①本覚思想形成の思想史的背景、②空海教学形成の思想史的背景と本覚思想、③空海教学の構造と本覚思想の三つである。これらの研究にあたって用いた資料は主として『大乘起信論』『仏性論』『大日経疏』『二経論』『十住心論』である。この章の結論は①空海教学の特色である全教

説の批判的綜合は本覚思想における始覚の展相に対応する。②空海教学の統一の契機は本覚思想における本覚の智淨相および不思議業相に類似する。③実践性の契機、そしてこれらの同一性に対応する差異性についてである。

第五章の『大乘起信論』と空海では、①『大乘起信論』と『大日経』『大日経疏』、②『大乘起信論』と『釈摩訶衍論』、③大乘起信論と空海、なる三項に分けてこれを論じた。そのうち①は『起信論』と『大日経』は教主論と言語観においてどのように異なり、どのように同じであるかを論じた。②では『起信論』と『釈論』の違いを一、五重問答、二、不二摩訶衍、三、円円海徳の仏、四、如義言説・義語・一一識心の四つの視座から考察した。これらによって、空海の立場は大乘仏教に対する密教の立場であり、この両者を媒介した論が『釈摩訶衍論』であること、しかし、『起信論』も空海も、最終的には法の立場は人の立場によって決定してゐることを認めていることを指摘した。

第六章、第七章は『釈摩訶衍論』と空海教学との関係を詳説したものである。そのうち第六章では、『十住心論』『秘蔵宝鑰』と『釈論』との関係であり、そのうち、『釈論』は『十住心論』の第九住心と第十住心との関係を明らかにする上で大きな役割を果たしていること、および真言の位置づけに関して『釈論』が果たした重大な役割について論じた。この章では更に『秘蔵宝鑰』と『弁顯密二教論』において『釈論』がいかなる役割を演じ

ているかを詳説したが、その結論を要約すれば、空海の思想における顕劣密優の教判の論理的根拠に関して、『釈論』の五種言説および一一識心の説はきわめて有力な論拠を提出しているということである。第七章は第六章を受けて、第六章の結論を示し、続いて①『大乗起信論』と『釈論』。②横堅の教判論以外の空海の諸論と『釈論』との関係。③空海教学における『釈論』の位置について論じた。そこでこの結論のみを記すと、『釈論』は『起信論』の釈において、三十三法門、不二摩訶衍、一一識心、如義言説等の新しい思想を打ち出し、空海はこれらを骨格（論理的形式）とし、密教の諸経論を血肉（思想内容）として、顕密の教判論ならびに密教の存在論、言語論、諸経の解釈学を構成した、ということが出来る。

第八章 華嚴思想と空海教学 では、横の教判という視点から『大日経』と『華嚴経』とを比較し、毘盧遮那仏や一切智智、自内証智等の思想において、二つの経がいかに接近しているかを考察し、しかも密教経典としての『大日経』は事相を説くゆえに、『大日経』は『華嚴経』の事相化であるとした。これに続いて、華嚴思想と空海教学との異同について、教主、教説、成仏の遅速、教益について考察し、教主の不説と説、教法の菩薩と仏の説の違い、成仏の遅速に関する理説と事説、得益の優劣について論じた。

第九章 不空三蔵の密教と空海 では、不空密教研究の現状と問題点、唯識思想と如来

藏思想。『大日経』の場合における唯識と如来藏、金剛智三蔵の思想。についてまず論じた。そこでこれらの予備的研究は、主として金剛頂経系の密教を伝えたと言われる不空三蔵の密教の特色を浮き彫りにするために、まず、唯識と如来藏との関係および、金剛智三蔵の密教について考察したのである。続いて不空三蔵の密教について、教判論、本尊瑜伽、仏身論、一切衆生の成仏なる四項目について論じ、また華嚴思想についての不空と空海のアプローチのちがいを明らかにした。またこの章の最後では、密教の民衆化において不空三蔵が文殊信仰を鼓吹したことを述べ、これに対する空海の密教の民衆化の方向性を曼荼羅信仰（文化・社会・教育活動等の意味も含めた）として指摘した。

四 第三部の概要

第三部は第一部、第二部において、歴史的に形成されたものとしての空海の思想を考察したのちに、空海思想を倫理的・宗教学的・あるいは哲学的な諸側面から考察して、その全貌を明らかにしようと試みたものである。このうち、第一章 真言密教における善の概念 においては、善という倫理学上の概念が、人間行動の因果関係の考察の上に成立していることを確かめた上で、それでは仏教の歴史において、このような善の概念はどのよ

うに規定せられてきたか、また真言密教においては如何という問題を設定し、これを研究したのである。そこでこの研究の順序としては、『俱舍論』『瑜伽論』『中辺分別論』についてまず考察し、続いて真言密教における善の概念を、『大日経』『大日経疏』『菩提心論』『三昧耶戒序』によって明らかにしようとした。そこでこれらの考察の結論としては、真言密教における善の概念は広義と狭義とがあり、狭義における世間の善と広義における出世間の善との関係が広義の善の中でいかに止揚せられているかが問題であることを指摘した。

第二章 空海の解脱観 ここでは解脱観とは何かについて予備的に論じ、続いて『三教指帰』における解脱観、両部の付法と『大日経』住心品における解脱観、横豎の教判論における解脱観について論じた。ここでは解脱観とは解脱の理論のみの問題ではなく、人間と人間の苦悩およびこれを救済する者の位置の問題であることを指摘し、空海の場合、それらはいかに解決されているかを考察した。

第三章 六大縁起論 ここではまず①仏教思想および仏教思想史上における縁起論の位置を確定し、つぎに②空海教学中における縁起論の位置について論じ、③六大縁起論の仏教思想中の位置における特色を明らかにし、最後に④体大について述べた。このうち、③の六大縁起論の特色については、縁起の体を六大によって示したこと、またこれを種子真

言として示したこと、および即身成仏という成仏論中に縁起論を位置づけたことという三点を指摘した。

第四章 即身成仏の思想―空海とツォンカバとの対比― 空海の即身成仏の思想は彼の仏教思想を他の仏教者の思想と区別する重要なメルクマールである。そこでこの思想が、『大日経』およびその両釈にどのように規定されているかを考察し、つぎにチベットの大仏教学者ツォンカバにおける即身成仏思想を検討し、最後に空海の即身成仏思想を検討して、両者の対比研究を行った。このうち、即身成仏の実践方法について、ツォンカバは本尊瑜伽を説き、空海は三密瑜伽を説くことを指摘したが、この実践方法の内容の詳細な比較研究にまでは至らなかった。

第五章 顕密差別論―空海とツォンカバとの対比― 第四章に続いて、空海の顕密差別論あるいは教判論を考察するのの際し、時代は異なるがチベットにおいて空海と同じような思想的立場を占めるツォンカバの教判論を参照して、両者を比較することにより、空海の教判論の特性を考察した。この研究によって、両者が中観・唯識・如来蔵・密教をどのように位置づけているかが明らかになり、またとくに密教に関する両者の思想の異同が判明した。

第六章 真言密教の仏身論 ここではまず仏身論とは何かを一般的に論じ、続いて真言

密教思想中における仏身論の位置を明らかにし、さらにこの仏身論形成の歴史的背景を①『大疏』『広釈』『略釈』における仏身観の相違。②『大疏』と『金剛頂経』の仏身観の相違。③『菩提心論』の仏身論と空海の仏身論。④空海以後の仏身論の四項目に分けて、それぞれ考察した。これらの考察の結果、空海の仏身論は空海教学の構造的把握に応じて、並列的・段階的・重層的という三重構造の中で把握することができ、これは順次に顕教の仏身観、密教の浅略釈の仏身観、密教の深秘釈の仏身観とすることができるとを明らかにした。

第七章 空海の言語観 ここではまず言語観が仏教思想上どのように位置づけられるかを一般的に論じ、つぎに、空海の言語観に先行する仏教諸思想の言語観を、『入楞伽経』『大乘起信論』『釈摩訶衍論』『大日経』『大日経疏』の各経論の場合について検討し、最後にこれらを踏まえて、空海の言語観についてその『声字実相義』を中心として、これを考察した。この結果、空海の言語観は大乗仏教の言語観を前提としながら、それを浅略釈とし、深秘釈としての真言密教の言語観を確定したという結論に到達した。

第八章 空海以降の日本真言宗の言語観―本地身説法と加持身説法をめぐって― この章では空海以降の日本真言宗内における最大の論争点としての仏身論に関し、これを言語観との関係の上で捉えかえし、主要な論争者たちの主旨を要約して示し、それらに対する

評価を付した。

以上。